AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録（2014.12）平成２５年度:1.

幼児の皮膚における健常部位とストーマ装具貼付部位の角質水分保持機能の比較

日野岡 蘭子、堀 仁子

幼児の皮膚における健常部位とストーマ装具貼付部位の角質水分保持機能の比較

日野岡蘭子[1]、堀　　仁子[2]
1 旭川医科大学病院　看護部
2 旭川医科大学皮膚科学講座

＜目的＞

新生児期からストーマ保持している児は、腹部に24時間ストーマ装具を装着し密閉環境となっている。この通常の環境とは異なるストーマ装具下の皮膚において、角質水分量、経皮水分喪失量がどう変化しているのかを検証すべく非侵襲的に計測・解明を試みた。

＜対象＞

両親からの同意が得られた新生児期にストーマ造設となった２歳女児１名。

＜倫理的配慮＞

研究施設の倫理委員会承認を受けて実施した。両親には文書で以下について同意を得た。①調査協力の自由性　②協力如何に関わらず今後の治療、受診の保障　③途中棄権の自由　④個人が特定されないことを保障　⑤得られたデータ管理の廃棄方法を含む責任　⑥関連学会での発表。

＜結果＞

使用装具は周囲アクリル系粘着テープ付きのCPB系。測定項目は角質水分量、Trans-epidermal water loss(経皮水分蒸散量：以下TEWL)、腹部、上腕、大腿各１か所。ストーマ装具皮膚保護材貼付部位、粘着テープ部位各１か所。平均値、角質水分量腹部32.4　前腕46.0　大腿32.9　皮膚保護材貼付部43.9　テープ部46.1,　TEWL(g/㎡/hr) 腹部22.9 前腕35.0 大腿36.8　皮膚保護材貼付部22.5　テープ部38.9であった。

＜考察＞

先行研究においては健常児のバリア機能は、生後45か月までは部位により大きく変動することが推測されているが、ストーマ装具装着において、皮膚保護材貼付部位は健常皮膚とほぼ同等の機能が得られているのに対し、テープ部位においてはTEWLの上昇、角質水分量の増加を認めた。これはバリア機能の低下を示唆している。今回は１例のみであり結論を述べることはできないが、今後低出生体重児も含め皮膚保護材、粘着テープの連続貼付が乳幼児の皮膚に与える影響を明らかにする必要があると考える。